

## 教養教育におけるコミュニケーション教育 —音表現・脳科学・心理学から—

企画者：山地弘起（長崎大学大学教育イノベーションセンター）

話題提供者：橋本優花里（福山大学人間文化学部）

話題提供者：西田 治（長崎大学教育学部）

話題提供者：山地弘起（長崎大学大学教育イノベーションセンター）

指定討論者：Gehertz 三隅友子（徳島大学国際センター）

司会者：保崎則雄（早稲田大学人間科学学術院）

**企画趣旨** 学生のコミュニケーション力向上は、今日の大学教育の大きな使命となっているとあってよい。この課題に対して、各大学では対人関係や言語表現・情報活用などでの基本技能育成が積極的に図られている。しかし、単に適応主義にとどまるのではなく、様々な相互誤解を生じる異質な文脈や多文化状況でも対応できる素養を培うには、どのような学習機会が必要であろうか。本セッションではその可能性を有する授業事例を検討し、いわゆる 21 世紀型市民性で求められる批判的・創造的なコミュニケーション力に向けての教育改善を議論したい。

### 話題提供 1 「教養教育におけるコミュニケーション教育の重要性：心理学・認知科学の知見から」

福山大学人間文化学部 橋本優花里

近年、大学の教育現場では、汎用性のある知識・技能や態度を身につけるために、アクティブ・ラーニングが推奨されている。アクティブ・ラーニングの中核は、「グループワーク」「ディスカッション」「プレゼンテーション」であるが、樋口（2013）によれば、これらのすべてを経験した学生は、そうでない学生より、物事を批判的、多面的にとらえることができ、既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出すことができるようになったという。ところで、認知心理学においては、分散認知と呼ばれる考え方がある（ソロモン、2004）。この考えによれば、知覚、記憶、推論、知識形成、問題解決といった人間の認知は個人内の閉じた現象ではなく、仲間や物とのコミュニケーションや文化の中など、様々なところに分散しているという考えである。アクティブ・ラーニングと分散認知という二つの概念は、それらが語られる学問領域が異なるものの、「コミュニケーションの重要性」という共通点がある。アクティブ・ラーニングを円滑に進め、汎用性のある知識・技能、態度を身に付けるためにも、そして、各個人の認知の発達を促すためにも、他者とのコミュニケーションは重要であると言えるだろう。

本授業実践は、まず、心理学と認知科学の立場から、コミュニケーションを脳内での情報処理過程としてとらえ、脳とことばの関係を理解することから始めた。その後、正常なことばの発達過程を学習することで、健全なコミュニケーション様相の理解を深めた。そして、それらをつかさどる脳の一部が損傷したとき、我々のコミュニケーションにどのような問題が生じるのかを学んだうえで、コミュニケーションの障害を克服するための手段について概観した。さらに、授業の終盤では、脳とことばに関する相反する知見を題材に、

双方の立場からのディベートを行い、情報への多面的なアプローチを試みた。本実践では、これらすべての内容について、グループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーションの手法を用い、学生自身のコミュニケーション力を高めることを目指した。そして、コミュニケーションを通じて、社会に氾濫する脳科学の情報に対する批判力と分析力を養うことで、専門教育課程への基盤を築くことを目標とした。

### 話題提供2 「教養教育における芸術の活用」

長崎大学教育学部 西田 治

筆者は現在、「音・音楽」と「コミュニケーション」をキーワードとした教養教育の講義を2科目担当している。一つは、ドラムサークルというハンドドラムを用いたグループでの即興演奏を通じて、非言語的なコミュニケーションについて体験的に理解することをねらいとした講義である。もう一方は、サウンドスケープに関するもので、今回、事例として報告する講義である。

soundscape とは、「音の風景」を意味し、視覚でとらえる landscape に対し、聴覚でとらえる風景に焦点を当てた概念である。講義のねらいは、1) 音を聞くことそのものについて学ぶ、2) とらえた音の風景を言語で表現し他者に伝えることの2点である。受講生たちは、サウンド・エデュケーションのエクササイズを行うこと、あるいは音という言語化しにくいものを言語化することを通して、音の風景そのものをよく聞き味わうようになり、「音を聞く」ということについて学んでいく。また、自分の感覚を他者に伝えるのによりふさわしい言語表現を模索することで、言語表現そのものについても学んでいく。講義形式は、7～8名の小グループでの活動がメインである。

芸術の教育面での活用については、すでに Arts in Education という概念でとらえなおしが行われている。大学の教養教育においても単に音楽的技術をつけさせること、あるいは音楽的な知識を深めるという芸術教育 (Arts Education) ではなく、より広い意味で芸術の教育面での活用について実践し、考えていく時期が来ていると考える。本事例がその議論の端緒となれば幸いである。

### 話題提供3 「身体アウェアネスをベースとしたコミュニケーション授業」

長崎大学大学教育イノベーションセンター 山地弘起

普段のコミュニケーションでは言葉の内容に注意が向きがちだが、実際には顔の表情や声、ジェスチャーや姿勢などで伝わっているものが多く、しかも身体はその高度な調整機能によって「空気」を読み、状況に対応して、意図的・非意図的なさまざまな動きを同時展開している。ところが、一定の発達過程を経て固定化した行動パターンでは、こうした身体の知恵や潜在力を必ずしも十分に発揮できない。本来の柔軟な機能をルーチン化した習慣によって枠付けし阻害していることがむしろ一般的であるため、なじんだ心身習慣を越えて身体との関わり方・世界との関わり方を再学習 (脱学習) し、感受性や表現力を高めていく機会が求められる。

そこで本授業では、近年の脳科学や身体心理学の知見を背景に①身体とのかかわり、②自身とのかかわり、③他者とのかかわり、の3単元に分けて体験学習を組み立て、併せて日々の授業外課題によって身体アウェアネス (判断を混じえずにあたたかい関心を向け、身体ぐるみで精細に聴き沿っている状態) を深めていくことを試み、その効果を検討した。